平成 28 年度学内教育 GP プログラム事業経費　成果報告書

区　分	継続型
事業名称	特別経費事業 「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築（ECCELL）」
取組代表者名 担当者名	基幹研究院　人間科学系　教授　　浜口順子 基幹研究院　人間科学系　教授　　小玉亮子 基幹研究院　人間科学系　教授　　柴坂寿子 基幹研究院　人間科学系　准教授　　刑部育子

１．成果の概要

実施した事業の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、当初設定した目的・目標に照らし、３ページ以内で、できるだけ分かりやすく記述すること。必要に応じ、図表を用いても構いません。

平成 28 年度特別経費事業 ECCELL は、同年発足したお茶の水女子大学人間発達教育科学研究所教育保育実践研究部門の傘下に統合され、「社会人対象の乳幼児教育・保育に関する授業（生活科学部特別設置科目）および公開シンポジウム等の開催」に関する取り組みを行った。目標は、学部生と社会人が共に学び合うユニークなアクティブラーニングの場として成果をあげることである。平成 28 年度開講科目は、下記の 2 科目であった。

①ECCELL **子ども学ゼミ**Ⅰ・Ⅱ（前期・後期各 1 単位、専任教員 1 名・特任講師 1 名・非常勤 2 名が共同で担当した）は、受講生数　前期 22 名、後学期 13 名であった。その他こども園の保育者数名が随時参加した。

前期

第 1 回　自己紹介、各自の研究テーマに関する発表とグループ分け

第 2 回　グループごとのディスカッションと全体共有

第 3 回　ワールド・カフェの実施と次回に向けてポスターの作り方の説明

第 4 回　カンファレンスルームでのポスター発表

後期

第 1 回　各自の研究計画の発表および幼児教育保育に関する資料を元にしたディスカッション

第 2 回　研究の進捗状況報告および幼児教育保育に関する資料を元にしたディスカッション

第 3 回　ECEC に関するレクチャーとディスカッションの後、研究の進捗状況の報告

第 4 回　カンファレンスルームでのポスター発表

②ECCELL **乳幼児教育論**Ⅰ・Ⅱ（前期・後期各 1 単位、非常勤が担当した）は、受講生数　前期 23 名、後期 21 名であった。

前期集中

第 1 回　保育・養育環境と子どもの発達

第 2 回　子育て・子育ち支援

後期集中

第 1 回　保育における遊びと学び　保育施設見学

第 2 回　子どもの発達理解と保育における発達支援

社会人受講生の職業について、前学期と後学期ごと図 1 に示した。平成 27 年度までの ECCELL 社会人プログラムからの継続者が多い。平成 27 年時点の保育所・幼稚園の保育者（元職含む）の数に比べて保育所・幼稚園の割合は低下（前学期 39.4%・後学期 34.6%）しており、他の幼児教育保育関連施設の職員や養成機関の講師、企業の会社員、子育て中の母親など多様な背景を持つ人材が参加している。このように多彩な受講生が集い、学びを共有する授業が展開されているが、多様なリソースを持つ受講生であるからこそ受講生同士の情報交換やネットワーク作りの場を提供していくことにより、授業外でも自発的な学びや深まりが生まれていくことが期待される。

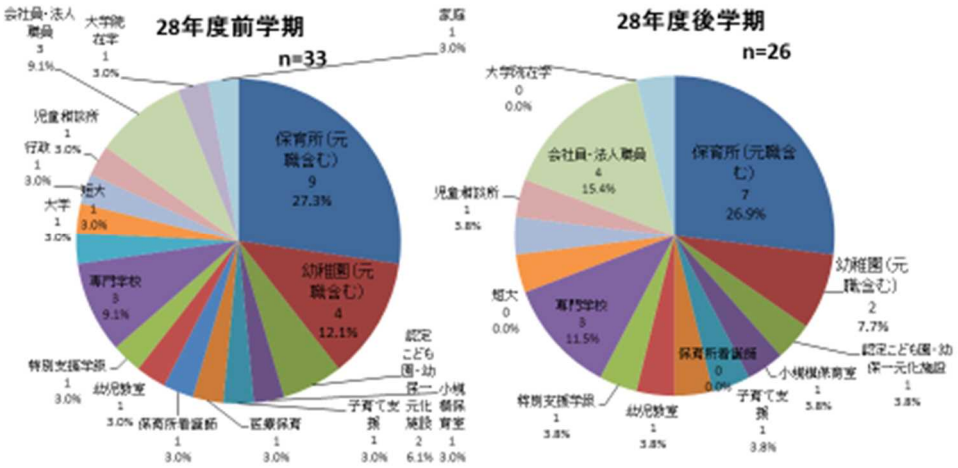

図 1　社会人受講生の職業別人数（28 年度）

平成 28 年度前学期受講生 33 名を対象とした学期末アンケート（有効回答 26 名、回収率 78.8%）における授業への満足度では、子ども学ゼミ（$n = 22$）約 73%が満足（とても満足+やや満足）、乳幼児教育論（$n = 23$）約 87%が満足（とても満足+やや満足）であった。講義形式の乳幼児教育論に比べ子ども学ゼミの満足度が低かったのは、各自研究計画を持ち寄るゼミナールであったが参加人数が多かったため、個人的に思うようなフィードバックが得られなかったからと考えられる。また、今回初めて導入したポスタープレゼンテーションに戸惑いを感じた受講生がいたのかもしれない。今後は受講者の背景も多様化しているため、受講者のニーズに配慮するとともに、アクティブラーニングによる参加型授業をさらに充実させる予定である。

授業を受けた後の自由記述からは、受講生の履修目的は多様だが、共通しているのは「学びを実際に生かしたい」という具体的な意思であった。それに応えるカリキュラム改善、柔軟な講座運営が必要と考えられる。履修の意義として感じていることは、第一に、大学での学びと自らの実践との間を行き来するなかで、知識が実践と結びつくという実感が得られることなど、往還的学びの保障、研究的実践者の養成であった。第二に、家庭や職場とは異なる第三の場に身を置いて学ぶことが、自律的に考え、内省する時間の保障につながること、大学という場のもつ質の高いリソースの活用である。第三に、受講生同士の学び合いや学びの共有があること、すなわち学びのコミュニティ形成であった。

ECCELL 科目の他の学習機会に対する動機づけの点では、他科目の履修に関心を持った割合が 59.3%と半数以上の受講生に他の学習機会への動機づけが認められた。学部編入学、大学

院編入学、他大学講座受講・編入学に関心を持った、実際に研究生になった、大学院受験したなどのケースも報告されており、ECCELL を土台にさらなるステップアップを図る受講生の姿がみられた。

ECCELL が主体となった公開シンポジウムは開催しなかったが、人間発達教育科学研究所主催の中国幼児教育訪日代表団視察研修受け入れ（平成 28 年 6 月）の際、ECCELL 事業に関するプレゼンテーションを行い、大変好評をいただいた。また、附属学校園と大学のアートコラボである、「第 3 回お茶の水女子大学ライフ×アート展」（平成 28 年 8 月）に、人間発達教育科学研究所共催、事務局として運営補助に参加した。H28 年度は大学構内のスチューデント・コモンズならびに大学本館中庭を利用し、展示・ワークショップ・トークイベントなど大学職員、関係者、地域住民保護者が集まり、ひとのライフ（生・生活・人生）にうまれるアートに関する学びの場を共有した。

平成 24 年度より開催されていた COSMOS（現グローバルリーダーシップ養成研究所）・いずみナーサリー共催イベントに平成 28 年度も企画運営として共催参加した。平成 28 年度は、第 5・6 回「子どもの世界をのぞいてみよう」のタイトルにより、いずみナーサリーとお茶大こども園の協力を得て 11 月に実施した。この取り組みの目的は、実際に子どもと接することを通して、その楽しさを実感し、子どもという存在について考えることである。平成 25 年度からは、男女共同参画に関わる職員研修の一環として実施、対象は学生・教職員である。参加者からは、年一回の開催なのでなかなか日程を合わせることが大変だったが非常に有意義であった、大学にいるけれども見ることができない場所を見学できるというのは新鮮であり、貴重な体験なので、また参加したいとの肯定的な評価を得ている。

本事業は以上のように、多様な人が学び合う場を作ることを目的としている。具体的には、①学内の多様なリソースをさらに開拓する、②附属校園との新たな連携の模索する、③学内の多様な専門性を、現場の保育の活性化、ひいては現職研修、子育て支援のリソースに活用する。④立場の違う人たちが、学びの「場」を共有し、「unlearn」を基軸に、多様性とフランクネスを生かした創造的な学びにつなげ、カリキュラムの開発と評価に結び付ける。⑤プロフェッショナルと、さまざまなステークホールダー（保護者、学生、社会人、地域）の特性を相互に生かしあう契機を作り出し、新しい学びのしかけを大学に実現することをめざしている。

ECCELL 社会人プログラムにおける今後の課題・計画としては、お茶大独自の PD(Professional Development)による保育者養成、現職教育の高度化と新しい保育者養成プログラムの開発があげられる。教育要領・保育所保育指針が改訂される平成 30 年度をにらみ ECCELL カリキュラムを、幼稚園教諭の上進講習、幼稚園教諭の更新講習に適合させる方向で、準備を行っていきたい。

２．今後の取組み継続に係る実施体制及び資金確保の状況について

本経費は、学外の競争的資金等によるプロジェクトで、プロジェクト実施期間終了後も引き続き取組みを継続するための体制を整備するために配分されたものです。本経費の支援期間終了後の実施体制及び資金確保の状況について記述してください。

本事業は、２年目の平成２８年度についても採択され継続が決定し、前年度と同額の資金が確保されている。ECCELL 担当講師について平成２８年度３名から、本年度は５名（全員学内の教員）に増やし、他大学の講師を随時招聘して授業内容を拡充、更新している。講義数は平成２８年度の２科目から本年度前学期の３科目へと増設した。